

そっ たく 啐 啄

令和6年9月1日刊行 No.23
編集・発行 大島町教育委員会
教育文化課事務局
TEL04992-2-1453
題字「井島 吉春」

旅

教育長 谷口 浄

毎年のことではあるが、5月と7月は、子ども達の移動教室や修学旅行が行われています。出発の際には棧橋まで見送りに行き、引率の先生方へのお願いや子ども達の様子等、これから新しい何かを発見する期待と体験したことがない不安も入り交じっての気持ちがよく伝わってきます。私も何度か体験してはいますが出発時のワクワク感は、50年以上過ぎた今でも忘れることはありません。見送りでは無事を祈り、こう願う。行った先々で多くのことを学び、また友人との絆を更に深め、あまり親交が少ないほかの学校の生徒とも仲良くなれるよい機会でもあると思います。修学旅行は、いつから始まったのかを調べて

みました。1886年2月現在の筑波大学の前身、東京師範学校が千葉の銚子方面に1泊1泊1泊2泊という「長途遠足」を実施しました（今から138年前）。これが修学旅行の始まりとされています。宿泊を伴う遠足として行われ、途中に鉱物や貝類の観察・採集、文化財や遺跡の見学といった「学び」の要素を取り入れて実施されました。あるアンケート調査によると、修学旅行は学びの旅であり、中学・高校で一番思い出に残っている学校行事は何かについて、一番は「修学旅行」で続いて「運動会」等となっています。

表題の「旅」について、辞書によると「住んでいる土地を離れて、よその土地を訪ねること」。普段生活をしている場所を一旦離れ、距離的に遠く離れた場所を訪ねることを言い、「旅行」は「目的地への到達」という結果を重視する点が特徴となっています。どちらにしても未知の体験など、得られるものは多い。非日常を体験できる、ご当地グルメを堪能できる、新しい出会いがある、視野が広がる、新しい自分を発見できる、心が癒されリセットができる等。

江戸時代、はじめは「伊勢参り」に代表される信仰の旅である。移動に厳しい制限のあった庶民にとって唯一、許されたのが信仰を目的とする旅であった。伊勢参りは、周期的に爆発的なブームとなり（文政13年、1830年）には、5ヶ月足らずで427万人の参宮者があったと記録されている。そこからちょっと寄り道をし、道中の別の楽しみが旅の目的となる。伊勢参りは口実にされ、旅は娯楽化し、人々の興味は物見遊山や温泉入浴へと移って行き、今のスタイルとなっていった。しかし、旅の大衆化は単に娯楽だけで語ることは出来ない。それは、同時に自ら見聞きして得た知識を地元に戻す学習の旅でもあった。行き交う旅人は、各地へ技術や道具を伝播させ異文化の交流となった（インターネット参照）。

私は、ここ数年、日ごろの運動不足の解消も兼ねて山登りにはまっている。登山というと、きついイメージになるが、一日から二日の東京近郊の低山に登る。若い時と比べ体力の衰える中、健康の維持増進と、筋力や体力、気力のバロメーターとしての狙いもある。林を抜け上へとあがるたびに体はきつくなるが、ふと後を振りむくと、ああ、もうここまで登ってきたのかと、眼下に広がる絶景が見えると感動もひとしおである。また、途中の木々や、水の流れ、植物・花等を眺めながら歩くのも楽しい。残念なことは、いつもその場所の一番良い時季に行くことができていないことである。紅葉が実に素晴らしいという所も葉が落ちた後となる。いたしかたないと思いながらいつかまた、リベンジしたい。また、富士山登山にはこんな思い出がある。一度目は学生の時にキャンプ

実習があり最終日に五合目から登った。八合目まで来ると手を伸ばせば手が届くという感じなのに中々頂上にたどりつくことができない。やっとのことで頂上に立つことはできたが今度は寒くて数時間もいられない。下山は須走ルートを通った。須走というだけあって滑り台に乗っているように下山した。二度目は、二中のクラス担当の先生が、生徒に富士山登山を体験させてあげたいとの思いから、お手伝いとして、一緒に登らせて頂いた。二中の生徒には一生に残る思い出になったことと思う。三度目は家族で子供二人を伴って登った時のことである。八合目を過ぎた岩場の道を一人の若者が自転車を担いで下りてきた。何故?と思い聞いてみた。反対側からのルートから登ったのだという。それにしても登りも下りも自転車を担いでのことである。ただ歩くだけでもつらいのに。いろいろな人がいるものだと思った。山で人に行き交う時は、どちらともなく声をかけ合う。労う気持とほんの一時ではあるが見知らぬ人との情報交換がある。下山をしている時のことである。小さな子ども、小学校中学年位の子ともと老人が登ってきた。声をかけお互い一休みといったところで聞いてみると、老人は70代後半、子どもは孫だという。富士登山は70数回になり毎年孫と登ることが楽しみになっているという。70数回ともなれば一年に一回以上登っていることになる。老人は地下足袋をはいていて実に機能的にみえ、さすがに回数を重ねていけばこそその出立ちである。老人は孫を、孫は老人を気づかいながらの登山で、なんともほほえましくて、羨ましくも思う。富士登山にはこんな話もある。「一度も登らない馬鹿、二度登る馬鹿」。これは富士山は日本で一番高い山なので、日本人なら一度は登ってみろ。しかし厳しい山でもあるので二度登る人も馬鹿だ。というたとえです。



旅をすることは大きな収穫に繋がることが多い。昔から「可愛い子には旅をさせよ」のように子どもが親元を離れるのも一種の旅でもある。島から出て、日本から出て、それぞれ見聞を広げ、渋沢栄一翁のように大きな「収穫」という荷物を携えて活躍する子どもたちに期待するとともに楽しみとしたい。また人の一生も人生の旅といえよう。

夢を見ること それは 夢に向かう努力をすること

教育委員長職務代理 山田 三正

1分1秒。1点の勝敗の分かれ目。金メダルの涙。敗退の涙。

初期からある水泳や新種目のプレイングまで、オリンピックという舞台上でレジェンドの活躍と10代の台頭を頼もしく思いつつ、相手とそして自分と戦う選手の躍動・熱戦をワクワクドキドキしながら感動と尊敬の念を持って見ています。

夢舞台までの選手自身の努力とそれを支えてきた多くの人（過去から各競技を支え、続けてきた人を含め）を思い、憧れと尊敬をして応援しています。（オリンピックが閉会している今、この文章は皆さんの目に触れていると思います。）

女子サッカーなでしこジャパンの第2戦対ブラジル。先取点を許した後半44分、日本がPKを獲得しDF熊谷紗希がゴールを決めて、日本が土壇場で同点に追いついた。

さらに後半45+6分、相手の連携ミスを拾った谷川がロングシュートを決めて、日本が逆転に成功した。最後まで諦めず、チーム全体で相手の守りを揺さぶり続けた中で、谷川選手にはゴールまでのシュートの道が一瞬見えたのではないかと思います。その道を見取る観察力と想像力、シュートを打つ瞬間の判断力、そしてボールを操る技術。これまでの努力の結晶だと思います。

NHKの新プロジェクトXで、日本女子サッカーのこれまでの軌跡をやっていました。1970年代、女子がサッカーをできない時代にサッカーを始め、オリンピックの舞台に立つ 夢を追う

過去の先達の働きと活躍でした。1981年の初の国際試合から始まり、2011年のFIFA女子ワールドカップでの優勝、2012年のロンドンオリンピックでの銀メダル獲得。特に2011年のワールドカップでは、宮間あや選手が決勝戦での延長戦、絶対あわせて打ってくれると信じて放ったコーナーキックは澤選手が同点ゴールを生み出し、試合をPK戦に持ち込みました。宮間選手は幼い頃から全体練習の後一人で黙々とキックの練習をし続けたそうです。

個人の絶え間ない努力と諦めない精神。チームメートを信じ自分を信じる気持ちの賜物だと思います。困難な状況に直面しても決して諦めず、常に前向きに挑戦し続ける姿勢。大きな課題と目の前の課題。その都度の判断と決断からの行動。組織として個人としての軌跡を見せてくれました。

人の生き方や生活で結果や勝ち負けだけでなく、日々の生活や仕事において、諦めずに努力を続けることの大切さを改めて再認識しました。

テレビの画面の中に、観戦する私の姿が……。



「一休さんのはなし」

委員 井島 吉春

私が小さい頃、「服装のみだれは心のみだれ」という標語のようなものをよく目にした。身なりがだらしないといい加減な人に見られてしまい、まず信用されないというのが一般的な考えだった。では、きちっとした身なりで挨拶もしっかりできて見るからに善人の人が必ずしも素晴らしい人なのか、表向きは良くても裏ではどうなのか。

今から600年ほど前の室町時代に一休宗純という禅僧がいた。後小松天皇の子供で、高貴なところに生まれたが、6歳で出家し、禅寺で修行を積み、幼少の頃からとても利発で、一休さんのとんち話は有名である。以前文部省（現在の文科省）推薦のテレビアニメも長く放映されていたこともあり、私たち年代以上の人達は一休さんといえば大体知っている。

後に大本山の禅師（僧としての最高位）まで昇りつめた方だが、色々な逸話があり、その中で人の外見についておもしろい話がある。

ある大金持ちの家で御先祖様の供養を盛大に行うことになり、その法要の導師（主役の僧）は世に誉高い一休禅師へ依頼することとなった。その家では仏間の飾りや会食の支度など準備万端に整えた。いよいよ法要当日はその家の主人をはじめ親類縁者、地城の名士等一同、玄関先で一休禅師を待っていた。すると1人の年老いた僧がやってきた。着ているものはボロボロの法衣で、いかにもみすぼらしい姿だ。その老僧は「こちらの家で先祖供養があると聞いたので、私にも読経させて欲しい」というと、主人曰く「今から大法要を一休禅師をお呼びして行うのだから、目ざわりなのでどこかへ行け」と追い払われてしまった。その老僧は素直にその場から姿を消し、しばらくすると、紫衣（天皇から賜った最高位の衣）をまとった一休禅師がお出ましになった。主人は丁重にお出迎えし仏間に通し、親類一同いよいよ法要が始まることを心待ちにしていた。すると一休禅師は突然、紫衣を脱ぎ仏壇の前へ置いて帰ろうとした。慌てた主人は「一休禅師、どうされたのですか？」と尋ねると、「私は先程、普段着ている衣で玄関前に立ったら目ざわりだから帰れと追い払われました。今度は、紫衣を着てきたら仏間へ通されました。あなたが迎えたいのは私ではなくこの紫衣なのでしょう」と言い、帰りかけた。主人は心から詫び、己の邪心を改め一生涯一休禅師に帰依したという話がある。

この話には外見だけで人を判断してはいけない、もの事には表と裏があり本質を見極めなければならない等の教訓がある。

現代社会において SNS 等の情報量は凄まじく多い。正確な情報なのか、そうでないのかを判断するのは極めて困難であり、一見親切そうな情報でも犯罪に巻き込まれる事もある。しかし IT は更に発達していくことは確実で、便利ではあるが、危険な面もある。

私達は外見、見かけ、うわべなどに惑わされる事なく本質を見極める「心眼」を開かなければならない。その為には IT 教育だけに力を入れるのではなく、心の修養も同時に進めていくことが重要である。



「パリ オリンピック」

委員 山本 忠夫

東京オリンピック 2020 から 4 年、正式にはコロナ感染症で 2021 になったから丸 3 年。今年、オリンピックパリ大会が開催されました。緊急事態宣言の 4 年前の大騒ぎが遠い昔のよう…。

オリンピック、スポーツ好きの私はやはりすごく楽しみにしていました。その中でも、今年、日本のバレーボールが強くなりました。特に男子は 1972 年のミュンヘン大会の金メダル以来のメダル獲得の可能性もあり期待されています（これが広報される頃はきっと結果も出ていますね）

1972 年は世界のクズと言われたチームが金メダルへ、信じられないようなサクセスストーリー。私は 12 歳の時この 1972 年大会を見てバレーボールに興味を持ちました。今でいうマンガ「ハイキュー！！」みたいな感じで。

その姿に憧れ、田舎者の私が広い世界に飛び出しましたが…。自分の人生が 180 度変わるような経験をしました。過酷な毎日をいま思い出すだけでちょっと背筋が伸びます。その最初の衝撃は、周囲の人間が自分よりも遥かに才能がある（ように見えた）。その中で未熟な自分を嫌でも受け入れることでした。

最近、思想家・武道家の内田樹先生の言葉を知りました。

「自分の無知や幼児性が自分の成熟を妨げているのではないかという漠然とした不安が学びの起動になる」要するに・・・自分の未熟さに苦しんでいる人だけが導き手（先生や師匠）に出会うことができ、その出会いによってそれまでの価値観や世界観がリセットされ、ブレイクスルーが起きる。そうやって「学び」は起動する。

この言葉を知って、私の子供時代はまさにこんな感じだったなあ、と思い出します。当時は結構、親も先生も厳しい時代で、何度も叱られ自分の未熟さを知る機会がたくさんありましたから、落ち込みながらも自分で師匠をさがして鍛えてもらい学ぶしかなかった。私はそのきっかけがたまたまバレーボールというスポーツだったのです。

最近、「思い通りにならない場面」に耐えられない子供が増えた、ということを目にします。時代が変わり教育の考え方も新しくなりました。良い方向に変わったことも多い反面、難しくなっている面もあると思います。自分の思い通りにならない子供に不快感を与えない…のではなく、思い通りにならない不快感とうまく付き合いながら生きていくことを伝えていく。子供にはその力があると信じ、「ネガティブな自分であっても変わっていくことができる」ということを発信し見守る。

それには勇気をもって広い世界に飛び出すことも良いことだと思います。きっかけなんて何でもいい。今の若者も外に出てすごい人に出会い、そこで自分の未熟さを知り、挫折があってもそこから学び大きく成長していったら欲しい。生きるって時に困難もあるけど、良いこと悪いことそのすべてがあるからこそ素晴らしい、と信じて、私も若者とともに精進していきたいと思っています。

「年を取ること」

委員 秋田 幸重

老いとの向き合い方、生の閉じ方について考えた事がありますか？今まで、自分が老いていく事や老後の事について深く考えた事はありませんでした。子育て中、この先やりたい事が沢山ある中、老後の事なんてまだまだ先の事だと思っていました。ですが最近、深く考えさせられる事がありました。

私には94歳になる親戚のお婆ちゃんがあります。元気だった頃は畑仕事が好きで、家の事や身の回りの事を卒なくこなし、物事もハッキリと言う方です。小さい頃の思い出は、隅々まで掃除が行渡っている家。厳しいお婆ちゃんの印象。しかし年を取るにつれ、今までこなせていた事が少しずつ出来なくなり、誰かのサポートがなければ日常生活も困難になっていきました。私がいに行けるのは土日祝。休日にはできる限り外出するよう心掛けています。一緒に買い物をして、知り合いに会って話が弾んだり、景色を見ながら昔話を聞いたり、ランチしたりするだけで笑顔になります。家へ行くと必ず言われる事があります。『家の事はちゃんと終わらせて来たのか？子供の事もちゃんとやってきたのか？』と自分の事よりも私の事を心配してくれます。私が手を貸そうとすると『甘えさせるな。自分でやる。亡くなった旦那に怒られる』と気丈に振る舞う姿に感心する事もあります。そんなお婆ちゃんも時折、弱音を吐きます。『悔しい。』『こんな歳まで生きてても意味がない。』『あんたも年を取ればこうなるから最後まで私の生き様を見ておきなさい。』と。本当は不安でいっぱいだろうに小さな体で、気丈にこの先の老いとの戦い、生の閉じ方を私に精一杯伝えてくれます。

そんなお婆ちゃんを見ていて思った事。これからもさまざまに迷い、悩むでしょうが、生きていてくれる限りいつも通りの生活、お婆ちゃんのやりがい、笑顔を大切にしていってあげたいと私は思っています。



【大島町教育相談室のご案内】

大島町教育相談室は、教育相談員・指導員・社会福祉総合相談担当の5名体制で、子ども達や保護者、教職員のための相談対応、支援を行っています。

教育相談事業

不登校・いじめ・発達の遅れ・学業不振・非行など、子ども（小・中学生）のあらゆる教育相談について、本人や保護者及び学校関係者のご相談をお受けします。

適応指導教室「パレット」

さまざまな理由で学校に行きにくかったり、教室に入れなくなったり、登校できないでいる小・中学生のための居場所です。一人一人に応じた体験活動や学習活動を行い、学校復帰や進路の実現に向けて支援をしていきます。

困ったり、悩んでしまった時は、迷わず（2-4544へ）直通電話へ連絡ください

【連絡先】大島町元町字丸塚 548 番 1 大島町生涯学習センター・郷内（2階）

電話：2-4544 メールアドレス：kyouikusoudan@citrus.ocn.ne.jp

※なお、来室される方は、教育相談員が学校訪問するなど不在の場合がありますので、事前にお電話にて確認のうえお出掛け下さい。

※啐啄（そったく）とは

鳥の卵が孵化しようとするとき、殻の中で雛鳥が外に出ようとして内からコツコツ殻をたたく音を「啐」といい、母鳥がその孵化の瞬間を悟り、殻の外をコツコツつき破ることを「啄」といいます。この啐と啄の呼吸が合うとうまく殻が割れ、丈夫な雛が誕生しますが、どちらか早すぎても遅すぎても良い雛は生まれません。教育も教わる側の生徒と教える側の先生が、啐・啄同時である事が理想であり、依って大島町教育委員会便りを『啐啄』と名づけました。

教育委員会カレンダー

月	日	内 容	場 所
9	2	始業式	各小中学校
	21	運動会	つばき小学校
	28		一中、さくら・二中、つつじ・三中
10	6	大島町体育祭 体育レクリエーション大会	大島全域
10	27	大島町体育祭 駅伝競走大会	大島全域
12	10	大島町立小中学校連合音楽会	開発総合センター2階大集会室
	26	雪国体験学習（12月29日まで予定）	新潟県上越市大島区（予定）
1	11	二十歳を祝う会	開発総合センター2階大集会室
	17	大島町立小中学校連合作品展(21日まで予定)	未定
2	1	大島町体育祭 野球大会（小学生の部）	差木地地域センターグラウンド
	中旬	大島町文化祭 芸能大会	開発総合センター2階大集会室
3	上旬	大島町文化祭 作品展	開発総合センター

「大島町がめざす子ども像」

— 新たな「教育体制」の出発にのぞんで —

一、「夢」の実現を求め人をめざす。

未来の自分にむかって本気で考え、学ぶ努力をかさねます。

一、「命」を大切にしている人をめざす。

生きるものすべてに、感謝・思いやりの心を持ち正しい行いを心がけます。

一、「郷土大島を」誇り」とする人をめざす。

愛する郷土・わが大島の、価値ある一員となるべく、進んで自己を鍛えます。

一、「国際的視野」を持って行動できる人をめざす。

グローバル化する国際社会に向けて、主体的に考え、国際的な創造力を持って世界を舞台に活躍できる人をめざします。

大島町・大島町教育委員会

（平成二十八年十一月）